

モダリティの結末点としての直説法現在形

—直説法現在形のステイタス—

人文学部教授 川 島 浩 一 郎
 福岡大学非常勤講師 渡 邊 佳 奈

1. はじめに

話し手が自分の発話に含まれる命題に対する何らかの態度を、当該の発話内部で表明するとき、その態度表明をモダリティと呼ぶ。たとえば (1) では、断定モダリティが表明されていると言われる。(2) では感嘆モダリティが、(3) では疑問モダリティが表明されている。

- (1) *Ça te regarde.* (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.20)
- (2) *Ça te regarde pas !* (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.94)
- (3) *Ça vous regarde ?* (Fred Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.67)

本稿では、直説法現在の動詞形（直説法現在形）のステイタスを、モダリティという意味的な観点から分析する。直説法現在の動詞形は、(1) から (3) にみられるように、様々なモダリティと共に起る。直説法現在の動詞形がフランス語の動詞体系においてどのようなステイタスをもつかという問題設定は、渡辺（2009）と同一である。

渡辺（2009）においては、直説法現在形と直説法の他の動詞形（複合過去形、半過去形、単純未来形）の間にある関係を、統辞的な観点から分析した。直説法現在形のステイタスを明らかにするためには、その機能を個別に検討するだけでなく、直説法の他の動詞形との関係を考慮する必要がある。複合過去形、半過去形、単純未来形それぞれの本質的な機能は具体的には特定せず、それらを α 、 β 、 γ という記号に抽象化したうえで、これらの記号相互の関係についてどのような論理展開が可能であるかの検証を試みた。つまり、特定の意味を経由せずに意味の問題にアプローチすることを試み、意味というよりむしろ統辞関係の視点から、直説法現在形のステイタスを分析した。この分析の結果、直説法現在形は、直説法の他の動詞形（複合過去形、半過去形、単純未来形）

の統辞的かつ意味的な結末点として機能するという結論を提示した。

本稿全体としての結論を先取りして言えば、直説法現在の動詞形は、モダリティが欠如した「モダリティの結末点」である。直説法現在の動詞形は、様々なモダリティの選択の中心部分に位置する。ただし直説法現在形そのものには、モダリティが欠如している。直説法現在の動詞形が「モダリティの結末点」であるのは、それがモダリティ不在の動詞形であることと無関係ではない。

2. モダリティの成立と選択

2.1 選択と意味の成立

選択をともしない行動は、意図的な行動ではありえない。たとえば髭が生えるか生えないかは、人間にとって、選択肢とならない。つまり髭が生えることも生えないことも、意図的な行動であるとは言えない。

よって意図的な行動は、必然的に、選択に立脚した行動である。たとえば、[wi] (oui) という音声を発信する行動が意図的な行動であるためには、それが、複数の選択肢（[wi] を発信する、[nɔ̃] (non) を発信する、何も発信しない、など）から選ばれた行動であることが必要である。

つまり言語による意図的な意味の伝達は、必然的に、選択に立脚した行動である。意図的に意味を伝達するという行動は、意図的な行動だからである。つまり [wi] (oui) という音声を発信することによって意味を伝えるためには、それが、複数の選択肢からの選択になっている必要がある。

- (4) — Tu arrives à suivre tes cours quand même ? —
Oui. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.172)

したがって言語コミュニケーションにおける意味の成立は、必然的に、選択に立脚する。もし色彩の名称として（表現対象がどんな色であろうが）「赤」しか選択で

きないとすれば、そこに「赤」という意味は成立しない。また、もし音声として [wi] としか発声できない環境があるとすれば、その環境においては [wi] によって伝達できる意味は存在しない。たとえば (4) の対話において、もし [wi] と返答する選択肢しかありえないとすれば（返答しないという選択肢もないとする）、その [wi] には意味は生じない。話し手にとっては、[wi] という音声を発信することが当然の状況で、予定通り [wi] という音声を発信しただけである。聞き手にとっては、[wi] という音声聞こえることが当然の状況で、予定通り [wi] という音声を聞いただけである。

2.2 入れ換えと表意単位の成立

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、その切片を他の切片と入れ換えることによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることが必要である。つまり、少なくとも次の2条件がみたされることが必要である。条件 (A) 発話の一部分において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。条件 (B) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。たとえば (5) と (6) では、*nausée* と *trouille* を入れ換えることができる。つまり *nausée* と *trouille* が条件 (A) をみたす。また *nausée* と *trouille* の入れ換えによって、(5) および (6) の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。つまり *nausée* と *trouille* が条件 (B) をみたす。したがって *nausée* と *trouille* はそれぞれ、少なくとも *j'ai ...* の直接目的という位置において、表意単位の実現形として認定されるための必要条件をみたしていると考えてよい。

(5) *J'ai la nausée.* (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.60)

(6) *J'ai la trouille, [...].* (Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.293)

他の切片と入れ換えることによって知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることは、ある切片が表意単位の実現形であるための必要条件である。言語コミュニケーションにおける意味の成立は、選択に立脚するからである（2.1を参照）。上記の条件 (A) と条件 (B) をみたす切片は、当該の文脈において、選択の対象となる切片である。たとえば (5) の *nausée* と (6) の *trouille* は、*j'ai ...* の直接目的としての（少なくとも潜在的な）選択肢である。(5) の *nausée* と (6) の *trouille* それぞれに意味

が生じるのは、これらが、発話構築における選択の対象となっているからにほかならない。

(7) *Bonjour, [...].* (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.17)

(8) *Bonsoir, [...].* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.169)

他の切片と入れ換えることによって知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることは、ある切片が表意単位の実現形であることの十分条件ではない。つまり上記の条件 (A) と条件 (B) をみたす切片が、表意単位の実現形であるとはかぎらない。たとえば [il] (il) の [i] と [εl] (elle) の [ε] は、条件 (A) と条件 (B) をみたす。しかし、これらの [i] と [ε] は音素の実現形であって、表意単位の実現形ではない。(7) の *jour* と (8) の *soir* は、条件 (A) と条件 (B) をみたす。しかし、これらの *jour* と *soir* が表意単位の実現形であるかないかは、考え方にもよる。

(9) *J'ai une autre idée, [...].* (Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.402)

(10) *J'ai une idée, [...].* (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.96)

入れ換えの対象となる切片として、いわゆる「ゼロ切片」が用いられることもある。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を指す。たとえば (9) の *autre* は、(10) にみられるように、ゼロ切片と入れ換えることができる。ようするに、(9) の *autre* は除去することができる。そして、この入れ換え（ないしは除去）によって (9) に知的意味にもとづく弁別が生じる。したがって (9) の *autre* は、表意単位の実現形としての必要条件をみたしていると考えてよい。

2.3 モダリティの選択と表意単位

話し手が自分の発話に含まれる命題に対する何らかの態度を、当該の発話内部で表明するとき、その態度表明をモダリティと呼ぶ。モダリティは、発話の内容に対する話し手自身による態度表明である¹。モダリティには、断定、感嘆、疑問、命令などがある。たとえば (11) では、断定のモダリティが表明されていると言われる。(12) では感嘆モダリティ、(13) と (14) では疑問モダリティが表明されていると考えてよい。

(11) *Ça marche.* (Philippe Djian, *37° 2 le matin*, Collec-

¹ モダリティの定義には、多様性がある。モダリティという用語は、多様な観点から使用されていると言ってもよい。甲斐 (2004) や甲斐 (2010) などを参照。

- tion J'ai lu, 1985, p.343)
- (12) Ça marche ! (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.118)
- (13) Ça marche ? (Ernest Hemingway, *Paris est une fête*, Collection Folio, 1964, p.119)
- (14) Est-ce que ça marche ? (*Elle*, 4 avril 2005, p.160)
- (15) Oui ? (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.316)

モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたすことがある。たとえば (13) にみられる疑問モダリティは、音声的には、疑問を表現するイントネーションを実現形とする。視覚情報としては「？」という文字を実現形とする。(13) に含まれる疑問モダリティは、(11) にみられるように、ゼロ切片と入れ換えることができる。(12) に含まれた感嘆モダリティと入れ換えることもできる。そして、これらの入れ換えによって (13) の発話の意味に、客観的、離散的な弁別が生じる。つまり (13) に含まれた疑問モダリティは、少なくとも *ça marche* への追加という文脈において、表意単位の実現形としての必要条件をみたすことになる。実際 (13) における疑問モダリティの実現形は、(14) における *est-ce que* という実現形と同等のステイタスを備えていると考えられる。

音声的に、イントネーションやアクセント以外の実現形をもたないモダリティも存在する。たとえば (15) に含まれる疑問モダリティは、疑問を表現するイントネーションを実現形とする。(15) における疑問モダリティは、音声的には、イントネーション以外の形で実現する可能性がない。Oui を実現形とする表意単位は、基本的に、*est-ce que* を実現形とする表意単位と共起することはない。なお、イントネーションやアクセント以外の音声的な実現形をもつかもたないかは、モダリティが表意単位の実現形であるかどうかとは別の問題である。

3. いわゆる直説法現在の動詞形におけるモダリティの選択

3.1 感嘆モダリティ

直説法現在の動詞形が共起するモダリティとして、感嘆モダリティが選択されることがある。モダリティとしての意味の成立、すなわちモダリティの成立は、選択に立脚する (2.2を参照)。たとえば (16) においては、イントネーションあるいは「！」という文字によって、感嘆モダリティが表明されている。(17) では *comme* という実現形、(18) では *qu'est-ce que* という実現形によって感嘆モダリティが表明されている。また (19) では、倒置という統辞法によって感嘆モダリティが表明されている。

- (16) *C'est pas ton style !* (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.59)
- (17) *Comme vous êtes gentil.* (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Les victimes*, Collection J'ai lu, 1964, p.19)
- (18) *Qu'est-ce que c'est moche.* (Anna Gavalda, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.132)
- (19) *Suis-je bête.* (Anna Gavalda, *Je l'aimais*, Collection J'ai lu, 2002, p.9)

直説法現在の動詞形と共起する感嘆モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたす。断定モダリティや疑問モダリティなど、他のモダリティと入れ換えることができるからである (2.3を参照)。直説法現在の動詞形と共起する感嘆モダリティのすべてが、表意単位の実現形であるのか、そうでないのかは、本稿では検討しない²。直説法現在の動詞形と共起する感嘆モダリティが唯一つしかないのか、あるいは複数あるのか (複数の感嘆モダリティの間での選択があるのか) も、今後の課題とする。

3.2 疑問モダリティ

直説法現在の動詞形が共起するモダリティとして、疑問モダリティが選択されることがある。モダリティとしての意味の成立、すなわちモダリティの成立は、選択に立脚する (2.2を参照)。たとえば (20) においては、イントネーションあるいは「？」という文字によって、疑問モダリティが表明されている。(21) では、*est-ce que* という実現形によって疑問モダリティが表明されている。また (22) では、倒置という統辞法によって疑問モダリティが表明されている。

- (20) *Tu sais lire ?* (Sophie Fontanel, *Fonelle est amoureuse*, Collection J'ai lu, 2004, p.93)
- (21) *Est-ce que tu sais quelque chose ?* (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.147)
- (22) *Sais-tu si elle a renoncé complètement à la peinture ?* (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Sueurs froides*, Collection Folio, 1958, p.41)

直説法現在の動詞形と共起する疑問モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたす。断定モダリティや感嘆モダリティなど、他のモダリティとの入れ換えが可能だからである (2.3を参照)。直説法現在の動

² 本稿では、記述の簡略化のため「直説法現在の動詞形」と「直説法現在の動詞形を中心とする文」を区別して表記しない。

詞形と共起する疑問モダリティのすべてが、表意単位の実現形であるのか、そうでないのかは、本稿では検討しない。直説法現在の動詞形と共起する疑問モダリティが唯一つしかないのか、あるいは複数あるのか（複数の疑問モダリティの間での選択があるのか）も、今後の課題とする。

3.3 命令モダリティ

直説法現在の動詞形が共起するモダリティとして、命令モダリティが選択されることがある。モダリティとしての意味の成立、すなわちモダリティの成立は、選択に立脚する（2.2を参照）。たとえば(23)から(28)は、いわゆる命令文として発話されている。つまり、命令モダリティが表明されている。

- (23) Tu *marches* devant moi, et tu ne *cries* pas, tu ne te *débats* pas. (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.162)
- (24) Vous *obéissez* bien à Garance, les filles, et vous *êtes* sages. Promis ? (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.132)
- (25) On se *retrouve* à Marseille dans une heure. (Sébastien Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.168)
- (26) Tout le monde *s'assoit* en silence ! (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.106)
- (27) Tu *es* gentille de te rasseoir. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.106)
- (28) Vous *avez* un stylo s'il vous plaît ? (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.87)

直説法現在の動詞形が共起する命令モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたく。感嘆モダリティや疑問モダリティなど、他のモダリティと入れ換えることができるからである（2.3を参照）。直説法現在の動詞形と共起する命令モダリティのすべてが、表意単位の実現形であるのか、そうでないのかは、本稿では検討しない。直説法現在の動詞形と共起する命令モダリティが唯一つしかないのか、あるいは複数あるのか（複数の命令モダリティの間での選択があるのか）も、今後の課題とする。

3.4 断定モダリティ

直説法現在の動詞形が共起するモダリティとして、断

定モダリティが選択されることがある。モダリティとしての意味の成立、すなわちモダリティの成立は、選択に立脚する（2.2を参照）。たとえば(29)から(31)は、いわゆる断定文（発話に含まれる命題を事実として提示する文）として発話されている。つまり、断定モダリティが表明されていると言うことができる。なお断定モダリティは「直説法」とも呼ばれる。

- (29) Nous *sommes* le 22 janvier 2004. (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.11)
- (30) Elle *est* américaine, étudiante en troisième année à l'université de Berkeley. (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.13)
- (31) Tout homme encore en vie après 30 ans *est* un con. (Frédéric Beigbeder, *L'amour dure trois ans*, Collection Folio, 1997, p.58)

直説法現在の動詞形と共起する断定モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたく。感嘆モダリティ、疑問モダリティなど、他のモダリティとの入れ換えが可能だからである（2.3を参照）。

ただし直説法現在の動詞形と共起する断定モダリティは、結局、表意単位の実現形ではないと考えられる。端的に言えば、断定モダリティに相当する実現形そのものが存在しないからである³。直説法現在の動詞形と断定モダリティが共起している状態は、モダリティを表現する表意単位の実現形が不在の状態である。

3.5 非・断定モダリティ

話し手が自分の発話に含まれる命題を、事実として提示することのできない命題として提示するとき、その態度表明を非・断定モダリティと呼ぶ。非・断定モダリティは、かならずしも、命題が事実と反すること（つまり非現実）の表明ではない。非・断定モダリティには「現実でも非現実でもないことの表明」も含まれる。

- (32) Je ne peux pas perdre Mallory, [...]. Si je la *perds*, je *perds* tout. (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.286)
- (33) Je crois pas que j'*ai* peur des ours. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.88)
- (34) Y a-t-il une loi selon laquelle tous les meurtriers psychopathes *sont* forcément jeunes ? (Dean Ray Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.136)

³ 川島（2005）、川島（2013b）、川島（2015）、川島（2017a）、川島（2019a）、川島（2020a）を参照。

- (35) D'après son informateur toujours, la police ne lâche pas la piste Saldon, [...]. (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.69)
- (36) Décidément, il n'est pas bête, le petit ! Il a tout deviné. (Françoise Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.18)

直説法現在の動詞形が共起するモダリティとして、非・断定モダリティが選択されることがある。モダリティとしての意味の成立、すなわちモダリティの成立は、選択に立脚する（2.2を参照）。たとえば(32)の *je la perds* が（事実ではなく）仮定であることは、*si* という表意単位の実現形を使って表明されている。(32)の *je perds tout* が事実でないのは、モダリティの問題というよりも、それが単に仮定の帰結だからである⁴。(33)の *j'ai peur des ours* が（話し手にとって）事実ではないことは、*je crois pas que* という実現形によって表明されている。(34)の *tous les meurtriers psychopathes sont forcément jeunes* や (35)の *la police ne lâche pas la piste Saldon* は、必ずしも事実とは断定できない命題の提示である。(36)の *il n'est pas bête* は「彼は頭がよい」という意味で用いられている。「愚かでないこと」は「頭がよいこと」の必要条件であって、十分条件ではない。よって(36)における *il n'est pas bête* を「彼は頭がよい」の意味で用いることは、必ずしも事実の提示ではない。このレトリックには、非・断定モダリティの関与があると思われる⁵。

直説法現在の動詞形と共起する非・断定モダリティには、表意単位の実現形としての必要条件をみたすものがある。断定モダリティなど他のモダリティと入れ換えることができる非・断定モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたす（2.3を参照）。直説法現在の動詞形と共起する非・断定モダリティには、(32)の *si* のように表意単位の実現形であるものもあれば、(36)の *il n'est pas bête* におけるように表意単位の実現形でないものもある。直説法現在の動詞形と共起する非・断定モダリティが唯一つしかないのか、あるいは複数あるのか（複数の非・断定モダリティの間での選択があるのか）は、今後の課題とする。

3.6 情意モダリティ

直説法現在の動詞形と共起するモダリティとして、情意モダリティが選択されることがある。話し手が自分の発話の内容に対して何らかの感情を表明するとき、その態度表明を情意モダリティと呼ぶ。たとえば(37)の *tu*

deviens de plus en plus intelligente et moi de plus en plus bête にたいする話し手の感情は、*j'ai l'affreuse impression que* という表意単位の実現形によって表明されている。(38)や(39)における話し手の感情は、イントネーションやポーズあるいは視覚情報としての「...」や「?!」によって表明されている。(40)における話し手の感情は、音声的な長短 (*bon* に対する *boooon*) を利用して表明されている。

- (37) J'ai l'affreuse impression que tu *deviens* de plus en plus intelligente et moi de plus en plus bête. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.365)
- (38) Elle *est* un peu folle ta copine... (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.90)
- (39) Tu *as* des cheveux blancs ?! (Anna Gavaldà, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.109)
- (40) C'est boooon... (Agnès Abécassis, *Au secours, il veut m'épouser !*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.12)

直説法現在の動詞形と共起する情意モダリティは、表意単位の実現形としての必要条件をみたす。疑問モダリティや断定モダリティなど、他のモダリティとの入れ換えが可能だからである（2.3を参照）。直説法現在の動詞形と共起する情意モダリティには、(37)の *j'ai l'affreuse impression que* のように表意単位の実現形であるものもある。情意モダリティは、複数あると思われる。話し手の感情は複数あるからである。

3.7 否定モダリティ

話し手が自分の発話に含まれる命題に対して、不同意を表明することがある。たとえば(41)においては、*Henri est beau* に対する話し手の不同意が表明されている。(42)では *ils ont l'air optimistes* に対して、(43)では *le destin, ça existe* に対して、話し手が同意していないことが表明されている。

- (41) Non, Henri n'est pas beau. (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.14)
- (42) Ils n'ont pas l'air optimistes. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.324)
- (43) Le destin, ça n'existe pas. (Guillaume Musso, *Je re-*

⁴ 川島 (2018) を参照。

⁵ たとえば愚かな人物について「頭がよい」などと言う皮肉の成立プロセスにも、非・断定モダリティの関与があると思われる。

viens te chercher, Collection Pocket, 2008, p.129)

命題に対する不同意の表明は、否定モダリティと呼べることがある。モダリティという用語は、大略、話し手による自分の発話に含まれる命題に対する何らかの態度表明を意味するからである(2.3を参照)。モダリティという概念は、場合によっては、かなり広い適用範囲を備えていると思われる⁶。

よって直説法現在の動詞形と共起するモダリティとして、否定モダリティが選択されることがあると言ってよい。実際(41)から(43)では、直説法現在の動詞形が否定モダリティと共起していると解釈することができる。

3.8 モダリティの欠如

直説法現在の動詞形が、モダリティと共起しない文脈がある。たとえば(44)の *comme un chat fixe un oiseau* は比喩であって、そこでモダリティが表明されているわけではない。(45)の *quand il fait beau* は、天気について「よい場合」と「わるい場合」を場合分けしているに過ぎない。(46)の *depuis que j'ai huit ans* は、時間的な基準点を提示しているだけである。これらの文脈は、モダリティが共起する文脈ではないと考えられる⁷。

- (44) Le policier perdu fixait son voisin comme un chat fixe un oiseau: [...]. (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.145)
- (45) Le problème, c'est quand il fait beau. (*Elle*, 19 septembre 2005, p.84)
- (46) Tu me connais depuis que j'ai huit ans ! (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.240)

モダリティの欠如は、モダリティの選択の欠如でもある。モダリティの選択がない文脈では、モダリティとしての意味、すなわちモダリティは成立しえないと言ってよい⁸。意味の成立は、選択に立脚するからである(2.1を参照)。モダリティが欠如した文脈は、モダリティの選択が欠如した文脈でもある。

4. モダリティの結末点としての直説法現在の動詞形

4.1 直説法現在の動詞形とモダリティの結末点

直説法現在の動詞形は、様々なモダリティと共起しうる。たとえば、感嘆モダリティ(3.1を参照)、疑問モダリティ(3.2を参照)、命令モダリティ(3.3を参照)、断定モダリティ(3.4を参照)、非・断定モダリティ(3.5を参照)、情意モダリティ(3.6を参照)、否定モダリティ(3.7を参照)など、直説法現在形が共起する可能性があるモダリティは多岐にわたる⁹。直説法現在の動詞形が、モダリティと共起しない場合もある(3.8を参照)。

- (47) Bon, ça va ! (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.169)
- (48) Ça va ? (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.22)
- (49) Est-ce que... est-ce que ça va ? (Dennis Etchison, *Rêves de sang*, Collection Le cabinet noir, 1998, p.16)
- (50) Ça va... (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.44)
- (51) À part que je m'ennuie de toi... ça va. (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.178)

モダリティの成立は、複数のモダリティを選択肢とする選択に立脚する。たとえば(47)にみられる感嘆モダリティの成立は、(48)や(49)の疑問モダリティ、(50)の情意モダリティ、(51)の断定モダリティなど、モダリティとしての選択肢が他にあることに立脚する。

複数の「モダリティと共起している直説法現在の動詞形」の共通部分は、直説法現在の動詞形そのものである。たとえば(47)の *ça va !*、(48)の *ça va ?*、(49)の *est-ce que ça va ?*、(50)の *ça va ...*、(51)の *ça va* の共通部分は、直説法現在の動詞形を含んだ *ça va* にほかならない。直説法現在の動詞形におけるモダリティの成立は、そこに追加するモダリティとして何を選択するかの問題である。

したがって、直説法現在の動詞形は、モダリティの結末点として機能しうる動詞形だと言うことができる。直説法現在の動詞形は、複数のモダリティの選択の中心部分に位置するからである¹⁰。モダリティの結末点として

⁶ モダリティという概念には、曖昧さがあると言い換えてもよいかもしれない。

⁷ 接続法現在の動詞形が現れる文脈には、モダリティの選択が欠如した文脈がある。この文脈では、接続法などのモダリティが欠如している。川島(2012b)、川島(2017b)、川島&渡邊(2017)を参照。

⁸ 川島(2014)を参照。

⁹ 直説法現在の動詞形と共起しうるモダリティを、ここで網羅的に提示しているわけではない。

¹⁰ 直説法現在の動詞形は、直説法の動詞形の機能的な結末点である。渡辺(2009)を参照。

機能しうることは、直説法現在の動詞形であることの、いわば必要条件である。ただし、十分条件であるとは言えない。モダリティの結末点として機能しうる動詞形は、直説法現在の動詞形だけではないと思われる。

4.2 直説法現在の動詞形におけるモダリティの欠如

直説法現在の動詞形は、多様なモダリティと共起することができる。たとえば、感嘆モダリティ（3.1を参照）、疑問モダリティ（3.2を参照）、命令モダリティ（3.3を参照）、断定モダリティ（3.4を参照）、非・断定モダリティ（3.5を参照）、情意モダリティ（3.6を参照）、否定モダリティ（3.7を参照）などと共起する可能性がある。

- (52) Oui. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.14)
- (53) Oui ? (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.181)
- (54) Oui ! (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.230)
- (55) Oui... (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.202)
- (56) Mais oui ! (Eric-Emmanuel Schmitt, *La rêveuse d'Ostende*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.226)
- (57) Ouais ! (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.70)
- (58) Ouais... (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.168)
- (59) Ah ouais ? (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.60)

よって直説法現在の動詞形そのものには、モダリティが欠如していると考えられる。多様なモダリティと共起することができるのは、直説法現在の動詞形そのものにモダリティが欠如しているからにほかならない。(52)から(59)にみられるように、ouiという表意単位の実現形は様々なモダリティと共起しうる¹¹。(57)や(58)、(59)のouaisは、ouiに何らかのモダリティを加えたものと解釈することができる。多様なモダリティと共起することができるのは、ouiという実現形自体にモダリティが含まれていないからである。直説法現在の動詞形の場合も、これと同様と考えてよい。

実際、直説法現在の動詞形は、モダリティが欠如した文脈にも現れうる。モダリティが欠如した文脈は、モダリティの選択が欠如した文脈でもある（3.8を参照）。もし直説法現在の動詞形自体に何らかのモダリティが内

在しているとすれば、モダリティが欠如した文脈に直説法現在の動詞形は現れえないはずである。

直説法現在の動詞形は、また、相反するモダリティと共起することができる。たとえば、断定モダリティとも非・断定モダリティとも共起することができる。断定モダリティと共起しながら、命令モダリティや否定モダリティと共起することもできる。相反するモダリティと共起することができることから、直説法現在の動詞形そのものには、モダリティが欠如していると考えざるをえない。

したがって、直説法現在の動詞形がモダリティの結末点として機能しうるのは、それがモダリティが欠如した動詞形だからだと考えられる。直説法現在の動詞形は、モダリティが欠如した文脈にも現れうる。相反するモダリティと共起する可能性もある。直説法現在の動詞形は、モダリティが欠如した「モダリティの結末点」であると言ってよい。

5. まとめ

モダリティの成立には、複数のモダリティの入れ換えができることが必要条件となる。意味の成立は、選択に立脚するからである。モダリティの選択のない文脈にあっては、モダリティは成立しない。

直説法現在の動詞形は、多様なモダリティと共起することができる。直説法現在形は、たとえば感嘆モダリティ、疑問モダリティ、命令モダリティ、断定モダリティ、非・断定モダリティ、情意モダリティ、否定モダリティなど、様々なモダリティと共起することのできる動詞形である。

したがって直説法現在の動詞形は、多様なモダリティが成立する文脈であると言ってよい。直説法現在の動詞形を中心として、様々なモダリティの選択が可能だからである。複数の「モダリティと共起している直説法現在の動詞形」の共通部分は、直説法現在の動詞形そのものである。複数のモダリティ選択の中心部分に位置する直説法現在の動詞形は、モダリティの結末点として機能しうる動詞形である。

直説法現在の動詞形そのものには、モダリティが欠如していると考えられる。多様なモダリティと共起することができるのは、直説法現在の動詞形そのものにモダリティが欠如しているからにほかならない。実際、直説法現在の動詞形は、モダリティが欠如した文脈にも現れうる。直説法現在の動詞形は、また、断定モダリティと非・断定モダリティのような相反するモダリティと共起することもできる。直説法現在の動詞形がモダリティの結末点としてのステータスをもちうるのは、直説法現在の動

¹¹ Mais ouiについては、川島（1999）や川島（2020b）を参照。

詞形にモダリティが内在していないからである。

以上の観察や考察から、直説法現在の動詞形は、モダリティが欠如した「モダリティの結束点」と考えられる。直説法現在の動詞形は、様々なモダリティの選択の中心部分に位置する。ただし直説法現在形そのものには、モダリティが不在である。

参考文献

- 甲斐基文(2004)「Charles BALLY のモダリティ理論(その1)」『甲南女子大学研究紀要』第40号(甲南女子大学), pp. 79-83.
- 甲斐基文(2010)「Charles BALLY のモダリティ理論(その2)」『東京薬科大学研究紀要』第13号(東京薬科大学), pp. 17-21.
- 甲斐基文(2021)「フランス語における《double modals》」『ふらんぼー』第46号(東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会), pp. 19-39.
- 川島浩一郎(1999)「等位接続詞 mais と非動詞文 oui, si, non について」『言語・地域文化研究』5(東京外国語大学大学院地域文化研究科), pp. 43-55.
- 川島浩一郎(2005)「フランス語の「現在形」をめぐる一考察」『福岡大学研究部論集』A:人文科学編 Vol.5 No.1(福岡大学研究推進部), pp. 13-28.
- 川島浩一郎(2012a)「助動詞の定義と Pouvoir」『福岡大学研究部論集』A:人文科学編 Vol.11 No.4(福岡大学研究推進部), pp. 39-48.
- 川島浩一郎(2012b)「接続法と命令法に関する一考察」『福岡大学人文論叢』第44巻第1号(福岡大学研究推進部), pp. 255-268.
- 川島浩一郎(2013a)「叙法としての単純未来」『福岡大学人文論叢』第45巻第1・2号(福岡大学研究推進部), pp. 87-112.
- 川島浩一郎(2013b)「直説法記号素の不在とその非経験的論証」『福岡大学人文論叢』第45巻第3号(福岡大学研究推進部), pp. 269-290.
- 川島浩一郎(2014)「従属節における叙法記号素の対立の解消」『福岡大学人文論叢』第46巻第2号(福岡大学研究推進部), pp. 263-281.
- 川島浩一郎(2015)「いわゆる直説法三人称単数現在の動詞形-時制、アスペクト、法、態、人称、数の不在-」『ふらんぼー』第40号(東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会), pp. 57-75.
- 川島浩一郎(2017a)「直説法現在の動詞形におけるアスペクト記号素の不在」『福岡大学人文論叢』第49巻第2号(福岡大学研究推進部), pp. 511-525.
- 川島浩一郎(2017b)「接続法の動詞形における叙法記号素の存在と不在-フランス語教育の観点をまじえて-」『福岡大学言語教育研究センター紀要』第16号(福岡大学言語教育研究センター), pp. 29-38.
- 川島浩一郎(2018)「非現実の仮定が導く帰結の非現実性:教授法的観点における過去時制と非現実解釈」『Rencontres』第32号(関西フランス語教育研究会), pp. 75-79.
- 川島浩一郎(2019a)「いわゆる三人称単数の動詞形における数記号素の不在」『福岡大学人文論叢』第51巻第1号(福岡大学研究推進部), pp. 93-111.
- 川島浩一郎(2019b)「接続法の動詞形における主観性と客観性の弱化」『福岡大学人文論叢』第51巻第3号(福岡大学研究推進部), pp. 683-700.
- 川島浩一郎(2020a)「フランス語教育における不変化の動詞語幹の利用」『福岡大学教育開発支援機構紀要』第2号(福岡大学教育開発支援機構), pp. 45-55.
- 川島浩一郎(2020b)「間投詞的な文と非間投詞的な文従属という概念をめぐる」『ふらんぼー』45(東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会), pp. 51-70.
- 川島浩一郎&渡邊佳奈(2017)「初級教科書における接続法現在-接続法の用法を表現する諸概念-」『福岡大学研究部論集』A:人文科学編 Vol.17No.1(福岡大学研究推進部), pp. 113-123.
- Martinet, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, CREDIF.
- Martinet, André (1985), *Syntaxe générale*, Armand Colin.
- 渡辺佳奈(2009)「フランス語における「現在形」のステイタス-有標の項の結束点としての無標の現在形-」『フランス文学論集』第44号(日本フランス語フランス文学会九州支部), pp. 1-17.
- 渡瀬嘉朗(2012)『統辞理論の周辺』三修社.